

## ②明治初期の舟運

明治2年に津留が解かれた後、舟運は急激に発展した。その頃（明治20年代）の舟運について、舟着場・隻数を図5—20、図5—21に示す。舟着場は表5—11のように全流域で49カ所に達し、島根県内26カ所、広島県内23カ所である。ただし、江の川最上流にあたる土師舟着場と下流の吉田村浜舟着場の間は、江の川本川に設けられた堰の「ミズオトシ」を利用したものであり、農繁期はかんがい用水堰を設置するため6月上旬から9月下旬までは通船しなかった。水系別では江の川本川36カ所、西城川9カ所、馬洗川4カ所、八戸川1カ所を有している。

江の川を上下する舟運は江津—三次間を上り5日、下り2日で結ぶもので、口羽村から江の川中流域の舟運の拠点である邑智郡粕淵村大字粕淵字番所ノ沖舟着場までは6里72町（約31km）で、上がりは11時30間分を、下りは5時間20分を要した。三次—粕淵間は中国脊梁山地の先行谷に相当し、この間を上りは24時間強、下りは13時間弱で運航している。とりわけ三次—口羽間は急流をなしており、大灘瀬・小灘瀬・瀧瀬・白ヶ瀬など23カ所にわたる難所が続出していた。この区間は下りにも時間を要し、ほぼ同じ距離にあたる口羽～粕淵間より2時間半余りも多くかかっている。また、粕淵から河口左岸の拠点郷田字川端舟着場までは約60kmで、上り22時間、下り10時間40分を要している。これは時速にして上り2.5km/h、下り5.4km/hであり、口羽—粕淵間とほぼ同じ速度となる。この間では、川本大字川本字今津舟着場や川越村田津字重屋舟着場が比較的規模の大きい舟着場となっていた。また、江津の郷田川端舟着場には絶えず20～30艘の川船がつながれ、この他に河口付近には、小規模な舟着場が多数設けられた。運航回数は口羽村から粕淵までは月平均54往復に達し、特に都賀村大字都賀西渡り場舟着場から粕淵番所ノ沖舟着場間は70往復という頻繁な運航であった。粕淵から江津村大字郷田川端舟着場間は平均50回弱である。また、舟の大きさは江の川本川では長さ6間（約11m）、幅4尺（約1.2m）の大船が使われ、三次近辺では吃水の浅い長さ3間（約5.5m）、幅3尺（約0.9m）の軽古舟が主に利用されていた。積載量は下りが20～30駄（1駄＝約112.5kg）、上りは10駄程度で、下りの3分の1程度にも満たないこともあった。運賃は大正初年で米1升が15銭の

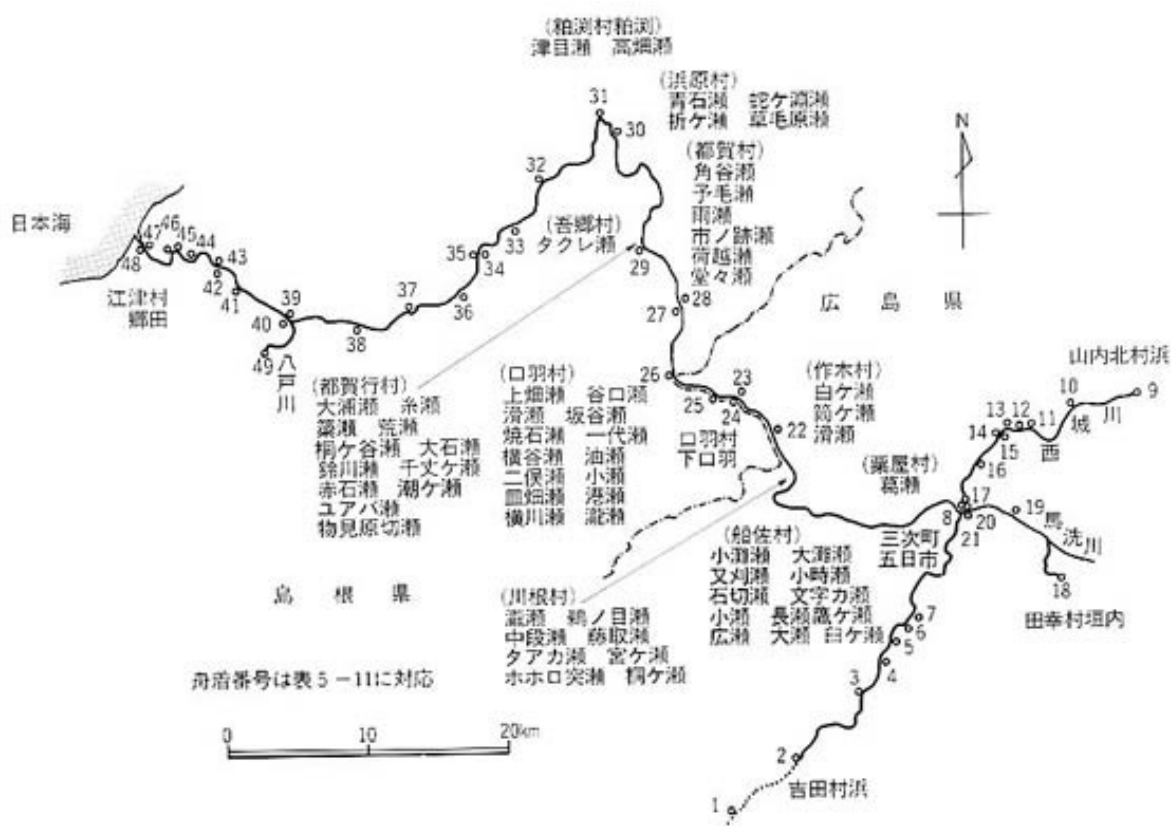
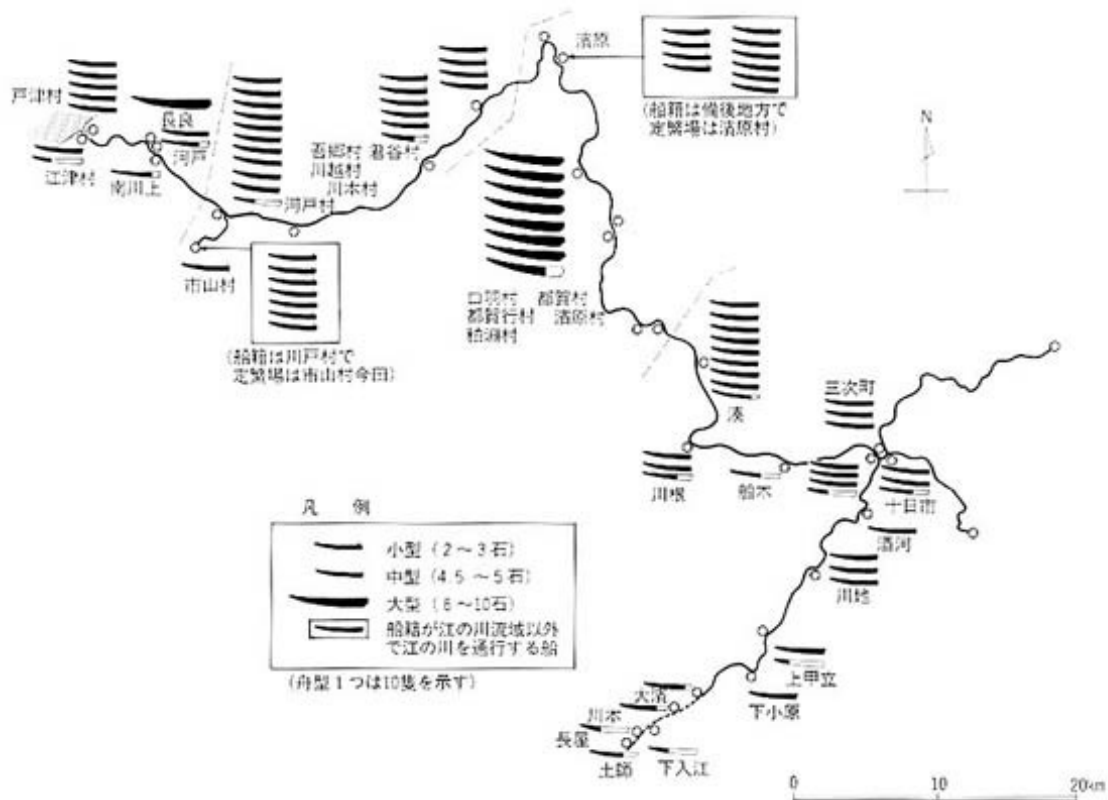


図 5-20 江の川の船着場 (明治20年代)と難所

表 5-11 江の川の船着場 (明治20年代)

番号	場所 ( 舟着場 )	番号	場所 ( 舟着場 )
1	高田郡刈田村土師	26	邑智郡阿須那村字都井字港
2	〃 吉田村字浜	27	〃 都賀村都賀西字渡り場
3	〃 甲立村字表平	28	〃 〃 都賀本郷字古市
4	三次郡川地村上川立字分布	29	〃 都賀行村都賀行字高梨
5	〃 〃 下川立字石見堂	30	〃 濱原村濱原字西中市、西上市
6	〃 〃 上志和地字郷西	31	〃 粕淵村粕淵字番所ノ沖
7	〃 〃 〃 字中所	32	〃 吾郷村乙原字領家
8	〃 三次町五日市蓮上場	33	〃 川本村川本字今津
9	恵蘇郡山内北村門田字中原	34	〃 〃 〃 字大船場
10	〃 口南村永田字高瀬	35	〃 川下村谷戸舟津
11	〃 〃 金田字本谷	36	〃 川本村因原字砂子田
12	〃 〃 〃 字下金田	37	〃 川下村坂本舟津
13	〃 〃 〃 字塩谷	38	〃 川越村田津字重屋
14	三次郡君田村東入君字木呂田	39	〃 谷住郷村字市沖
15	〃 河内村穴笠字折原	40	〃 川戸村字劔ノ元
16	〃 〃 東川内字横路	41	那賀郡川平村平田字瀬尻
17	〃 三次町五日市	42	〃 〃 南川上字恵口
18	三谷郡田幸村田幸字垣内	43	〃 松山村市村渡船場
19	〃 八次村畠数字宮田	44	〃 渡津村八神字價谷
20	三次郡三次町字松原 (荷揚場)	45	〃 〃 太田字桜谷
21	〃 原村十日市	46	〃 〃 〃 字舟津
22	〃 作木村下作木字港	47	〃 〃 下河戸字尾島
23	〃 〃 大津	48	〃 江津村郷田字川端
24	邑智郡口羽村下口羽字龜ノ尾	49	邑智郡市山村今田字新田
25	〃 〃 上田字青山		



5-21 高瀬舟の船籍別分布 (明治20年代)

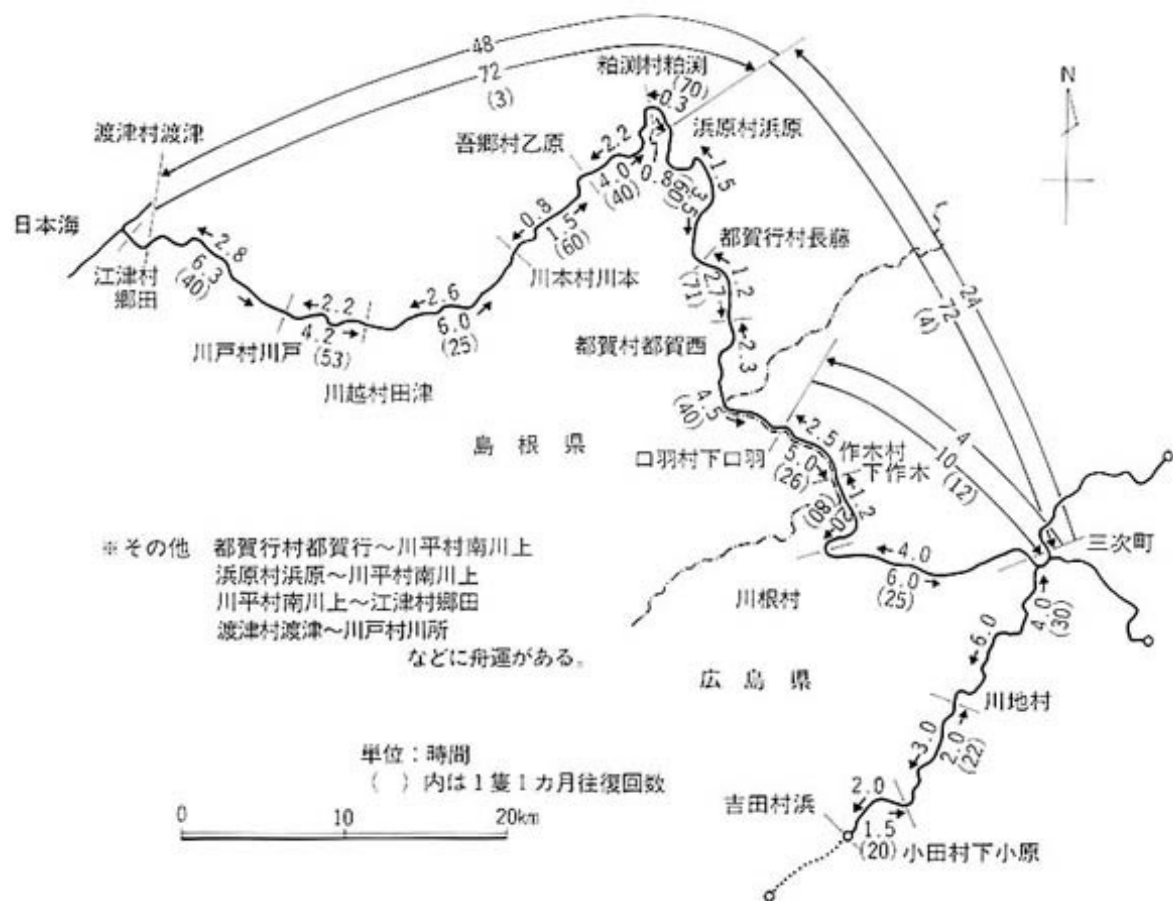


図5-22 船着場の所要時間と運行回数

表5-12 江の川舟運による物資の移動(明治20年代)

(単位:円)

番号	舟着場	移出	移入	番号	舟着場	移出	移入		
2	浜	醤油 400	米 83,200	23	大津	その他 1,836			
			鉄 68,000						
			鋼 14,400	24	下口羽亀ノ尾	晒 1,396	米 525		
		400	その他 185,478			扱 1,043	石油 310		
						その他 3,727	その他 1,782		
3	甲立表平	米 3,900	米 1,300	25	上田青山	鉄 2,323			
		麦 200	藍 350			石炭 523			
		その他 4,230	その他 1,836			銅 139			
4	上川立今市	米 288				2,985			
5	下川立石見堂	米 96		26	宇都井港	鉄 734	石灰 475		
6	上志和地郷西	米 284				米 233	菓子 320		
7	〃 中所	米 192				その他 1,543	その他 1,190		
8	五日市運上場	鉄 36,250	鉄 37,000			27	都賀西渡り場	炭 1,200	雑貨 1,600
		米 8,840	米 10,200					藍 575	酒 770
		雑貨 3,271	雑貨 4,000			その他 4,204	その他 4,930		
		48,361	51,200	28	都賀本郷古市	炭 1,050	石油 696		
9	門田中原	鉄 8,561				鉄 570	米 675		
		米 3,418		その他 4,256	その他 4,488				
		その他 12,348		29	都賀行高梨	炭 1,738	米 1,250		
						荒 1,040	酒 528		
10	永田高瀬	米 540				その他 3,244	その他 2,178		
		炭 144		30	浜原西中市 〃 西上市	米 22,000	米 22,500		
		その他 714				雑貨 15,000	雑貨 15,000		
11	金田木谷	米 270				荒 12,400	荒 12,400		
		その他 423				鉄 1,750	扱 2,100		
12	〃 下金田	米 288				その他 59,941	その他 61,334		
		その他 474		31	粕淵番所ノ沖	牛馬 75,000	反物 20,000		
13	〃 塩谷	米 1,080				藪 15,000	干 13,500		
		その他 1,329		反物 14,000	酒類 10,000				
14	東入岩木呂田	鉄 14,800	砂鉄 500	米 12,600	金物 9,600				
		その他 14,988		金物 8,000	砂糖 9,000				
				その他 206,040	その他 167,450				
15	穴笠折原	米 1,229		32	乙原領家	扱 2,701	石灰 2,968		
		その他 1,269				荒 375	荒 1,500		
						その他 3,710	その他 9,474		
16	東河内横路	米 828		33	川本今津	製銅 81,000	米 21,000		
		963					炭 16,435		
17	五日市	鉄 21,600	鉄 21,600				材木 8,300		
			米 4,752				その他 49,577		
			炭 399	34	川本大船場	楮 1,170	米 3,930		
			26,751			その他 1,990	その他 4,610		
18	田幸垣内	米 2,565		35	谷戸舟津	米 353	塩 21		
19	畠敷宮田	米 34,800				その他 685	その他 155		
20	松原	米 3,793	米 4,552	36	田原砂子田	楮 260	米 500		
21	十日市	米 61,320	米 14,000			その他 454	その他 887		
		雑貨 2,400	雑貨 1,500	37	坂本舟津	米 302	雑貨 93		
	63,720	15,500	その他 746			その他 135			
22	下作木港	鉄 1,296	米 650						
		石炭 1,000	酒 100						
		その他 2,648	750						
23	大津	鉄 1,536	米 650						

番号	舟着場	移出	移入	番号	舟着場	移出	移入
38	田津重屋	米 14,000 扱 芋 1,200 その他 _____ 15,958	塩 916 肥 560 その他 _____ 2,168	46	太田舟津	粗陶器 269 その他 _____ 475	米海石 12
39	市 沖	桐油 3,050 扱 芋 1,292 その他 _____ 5,716	米 415 塩 224 その他 _____ 868	47	下河戸尾島	塩 鯖 644 酒 512 その他 _____ 1,861	扱 芋 2,127 米 1,201 その他 _____ 5,491
40	刻ノ元	米 6,000 麻 2,250 紙 1,500 その他 _____ 10,468	米 1,750 麻 1,200 石炭油 500 その他 _____ 4,716	48	郷田川端	鉄 27,666 銃 25,750 扱 芋 19,733 白炭 16,566 楮 11,095 木材 6,900 瓦 6,266 半紙 5,716 陶器 4,050 その他 _____ 144,248	銅 98,666 鉄 28,226 鋳 25,750 扱 芋 20,382 白炭 16,713 木材 13,500 楮 11,578 呉服・反物 10,008 その他 _____ 270,111
41	平田瀬尻	薪 606 その他 _____ 679	炭 764 その他 _____ 1,201	49	今田新田	米 1,650 その他 _____ 3,018	楮 904 塩 183 _____ 1,087
42	南川上恵口	銃 1,691 薪 522 その他 _____ 3,438	米 1,316 炭 779 その他 _____ 2,886	計		786,921	921,178
43	市村渡船場	銃 5,886 菅 笠 628 その他 _____ 7,081	酒 1,720 炭 908 その他 _____ 4,240	(注) 1. 番号は図5-11の船着き場を示す。 2. 品目は価格の多い順に記載し、割愛した品目はその他に入る。 3. 小計のない場合はその品目はその品目のみ移出入。			
44	八神價谷	銃 1,975 鋳 56 _____ 2,083	炭 935 砂鉄 603 _____ 1,539				
45	太田桜谷	銃 2,007 鋳 75 _____ 2,083	炭 937 砂鉄 514 _____ 1,452				

ころ、作木一江津間木材を運んで8～9円であった。船頭は通常1隻2人で、下りは櫂や楫を巧みに操りながら急流を下っていったが、上りになると順風であれば帆をはり、風がないときは船頭の一人が沿岸沿いの、いわゆる船頭道からロープで舟を引いて遡航した。

表5-12に荷物取扱高とその内訳を示す。最も取扱高が多いのは江の川舟運の発着地である河口の郷田川端舟着場であり、粕淵番所ノ沖、吉田浜舟着場、三次五日市運上場（五日市舟着場・松原舟着場を含む）、川本今津舟着場とつづく。遡航最終地の吉田浜舟着場に陸揚げされた荷物は、馬で上根峠を越して可部に運び、可部でまた舟積し、太田川本流を広島へ、あるいは太田川支流三篠川舟運で広島方面に送られた。一方、郷田へ集められた物資は日本海を南北に航行する年2回の廻船に積み込まれ、北は北海道、南は北九州から釜山・仁川等へも輸送された。舟留りは河口西側の幸島にあったが、水深が浅いため一部の荷物は海へ出て舩で積み込まれていた。筏下しは丸太や竹材で、竹は80～120束を筏として荷造りし大貫付近の物が最も多く出荷された。

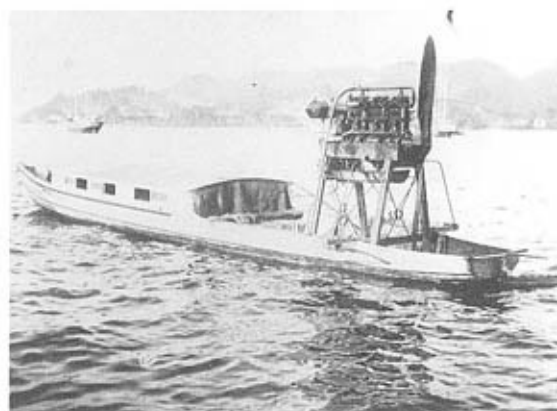
江の川舟運は中国山地の「たたら」製鉄地帯を横断しており、鉄製品が米とともに移送物の中心を占めている。幕末から明治20年代までがたたら製鉄の最盛期であり、鉄・銃・鋼・紙・砂鉄などが大量に運搬されていた。鉄製品の搬出の中



心となっていたのは、上流部では門田中原舟着場と東入君木呂舟着場で、それぞれ西城川上流域と神野瀬川流域のたたらを背景としている。これらは主に吉田方面へ運搬されたが、吉田浜舟着場には江の川中流域で生産した製品も多く搬入された。中流域では、作木港・下作木大津・下口亀ノ尾・上田青山・宇津井都賀西渡り場・都賀本郷古市等の港から付近の鉄を搬出している。また、都賀西と都賀本郷には大量の砂鉄が搬入されていることが注目される。邑智郡粕淵より下流では鉄山地が数箇所集中しており、搬出港は粕淵番所ノ沖と坂本舟津、川越田津舟着場に限られる。川越田津から搬出される鉄製品は邑智郡中・南部のものである。これらの鉄製品は河口付近の港で大量に荷降されるため、拠点港である郷田川端以外の港を多く利用している。その取扱数量はほぼ郷田に匹敵する。

郷田川端舟着場における取り扱い荷物を金額で見ると、移入は銅・鉄・銑・扱苧・白炭・木材・楮と続き、移出は鉄・銑・白炭・楮の順である。銅は大森で産出したもので、川本今津舟着場から送られてきたものである。中流部の中継地点粕淵番所ノ沖舟着場における移入は、反物・干鯛・金物・塩・砂糖など郷田川端とは対照的に日用品が多くなっている。また、移出は牛馬が群を抜いており、繭・米・反物・金物・炭と続く。上流部の三次五日市運上場では移出入とも鉄と雑貨である。最上流部の吉田では移入は鋼・米・鉄が中心で、日用雑貨の取り扱いがなく、三次までとは異なった傾向を示す。吉田浜と三次運上場間の小規模な舟着場及び馬洗川の舟着場はもっぱら米の搬出に利用されていた。

明治年代の後半から浜原―江津間に定期船が開通した。これは三光社が経営したので三光船と呼ばれた。船の底部をペンキで塗装した4人張りの手漕ぎ船であったが、当時としては最新の快速船であった。三光船は10艘位あったが、明治30年代には姿を消した。ついで大正期に入って飛行船といわれたプロペラ船が登場した。このプロペラ船は紀州熊野川で利用されていたものを移入し、1日2往復50人ぐらいの客と荷物を積んで江津から粕淵まで行き来していた。しかし、三江線が川越まで開通すると旅客も減少し採算がとれず、昭和6年に廃業した。



プロペラ船